

## 【東京】医科歯科連携の今後のテーマは「周術期の口腔ケア」-萩野礼子・おはぎ在宅デンタルクリニック院長に聞く◆Vol.2

2021年7月23日（金）配信 m3.com地域版

2019年に訪問歯科診療に注力する「おはぎ在宅デンタルクリニック」を開業した萩野礼子氏は、認定医が全国でも少ない顎顔面補綴を専門にし、嚥下食も提供する和食店でオーナーを務めるなど多様な顔を見せる。そんなユニークな歯科医師が在宅医療に必須の多職種連携で心がけていること、現在の課題や今後のテーマは——。（2021年6月15日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

——おはぎ在宅デンタルクリニックでは、患者の多くが医科のクリニックから紹介された人たちとのこと。多職種連携で意識していることは。

医療者と知り合える状況を自らつくっていくこと、他の職種の仕事を安易に判断せず、尊重する気持ちを持って接すること——。この2点は特に意識しています。

在宅医療に必須の多職種連携はそもそも、さまざまな医療者を知っていなければ始まらないので、勉強会や講習会、懇親会には積極的に参加するようにしていますね。私が文京区歯科医師会の理事を担当しているのも出会いの幅を広げることが目的の一つで、歯科医師会の役員であれば一般の開業医では難しい行政とのつながりもできやすくなります。実際、文京区が主催する地域ケア会議に参加する中で魅力的な医師と出会い、その先生から「紹介したい患者がいる。一緒に在宅をやしましょう」とご提案いただいたこともあります。

2番目に関しては、結局のところ、「スムーズな連携のためには人間関係が最も大事」ということです。在宅医療を行う医療者の中には他の職種に対して指示口調でものを言う人がいますが、それでは良好な関係は築きにくいのではないのでしょうか。確かに私も「これをやってくれていたら患者さんの口の中はもっと良くなるのに…」と思うことはありますが、当人たちが自分の仕事で忙しいことはありますし、また口腔ケアの重要性や内容は在宅医療者にもあまり知られていないのが実情です。ケアの大切さやメリットを伝えつつ、「お願いできますか?」と相談する形でコミュニケーションを取ることを心がけています。



萩野礼子氏

——先生は訪問歯科以外に「顎顔面補綴（がくがんめんほてつ）」を専門にしているそうですね。私は214人の歯科医師を取材しましたが、専門にする人に初めて会いました。

顎顔面補綴というのは、がんや先天性疾患、交通事故などであごの骨や舌を切除した患者さんに合った特殊な入れ歯を作ることにより、「嚥む」「飲み込む」「話す」という各機能の向上を目指し、見た目の改善も図るものです。歯科医療の世界ではニッチな分野で、担い手が全国的にも少ない状況です。学会の認定医が150人もおらず、実際に臨床を行っている人は50人に満たないのではないのでしょうか。

私のこうした専門性も絡み、医師からは担当患者に顎骨壊死のリスクがないか相談されることが多くあります。顎骨壊死とは、がんの治療に用いる薬の副作用などによってあごの骨が腐ってしまう病気で、「分子標的治療薬を入れたいけど大丈夫か口を診てほしい」といった要望をよく受けます。顎骨壊死は大きな虫歯や歯周病、入れ歯による傷などで口腔内に炎症が起きているとリスクが高まると考えられています。

この点で、今後の医科歯科連携においては「周術期の口腔ケア」もテーマに上がりやすくなっていくのではないのでしょうか。術前術後の口腔ケアによって予後が改善するケースがありますし、医療の進歩によって今は入院せずに通院で抗がん剤の治療を受ける患者さんが増えているので、地域の医療機関が協力し合って患者さんを支えていくことが一層、求められるように思います。

#### ——在宅医療の医科歯科連携における現在の課題は。

まだ連携の手前にあると思います。つまり、訪問歯科に対する歯科医師の認知度を高め、担い手を増やすことが最も大きな課題だと私は考えています。開業して改めて感じたのですが、訪問歯科のニーズは高く、また診療報酬が外来診療よりも高く設定されているため経営の安定性も高い。総じて、意欲や技術のある歯科医師であればやりがいを感じやすいと思うのですが、まだ同業者にもその意義や可能性、診療内容があまり知られておらず、教育の場も少ないため、担い手が全国的にさほど増えていません。

#### ——では、先生は訪問歯科医の教育にも携わっていきたいのでしょうか。最後に今後の展望を。

そうですね。教育には携わっていきたいと考えていて、私が若い歯科医師を雇用しているのもその一環です。その人は卒後5年目くらいでまだ診療を任せられる状況ではありませんが、「ぜひ学びたい」と希望してくれたので入職してもらいました。また、過去に文京区歯科医師会の会合で訪問歯科に関する講演を行ったことがあるほか、母校である東京医科歯科大学の歯科研修医のカリキュラムに当院での見学が組み込まれることも決まりました。大学によると既に厚生労働省の認可が下りているそうで、来年度から実施される予定だと聞きます。

在宅医療に関しては、近く在宅NST（栄養サポートチーム）の活動を本格化させていきたいと考えています。多職種が協力し合って患者さんの食支援に取り組むNSTのニーズは高いものの、これも訪問歯科と同様に在宅医療の現場では担い手が少なく、協働の仕組みがあまりつくられていません。そんな状況下で、当院と連携する「やよい在宅クリニック」の水口義昭院長が誤嚥性肺炎の予防などを目的にチームを立ち上げ、私も参加しています。今は私と同院の管理栄養士が栄養補助食の検討会などを開いています。

「食」に関していうと、私は台東区にある和食店「甚三紅（じんざもみ）」のオーナーを務めており、事前にお客さんから要望があれば嚥下食も提供しています。当院の患者さんのご家族も利用されており、場合によっては店で弁当を作って患者さん宅に持って行って行っていますが、今後は嚥下食の弁当の商品化やデリバリーも展開していきたいですね。医療者としてだけでなく、事業者としても患者さんがおいしく食べ続けられることに貢献していきたいです。

#### ◆萩野 礼子（はぎの・あやこ）氏

2004年に東京医科歯科大学歯学部を卒業後、東京医科歯科大学歯学部付属病院、国立がん研究センター中央病院歯科などに勤務。常磐病院歯科では福島県いわき市初となる訪問歯科の立ち上げに参画し、2019年に「おはぎ在宅デンタルクリニック」を開業。日本顎顔面補綴学会認定医。嚥下食を提供する和食店「甚三紅（じんざもみ）」も営む。

【取材・文・撮影＝医療ライター 庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

